



孫見服  
甲



5  
1847  
1







あんなのこころをいかにいかに  
かきばたきもほしくすきりし  
とらひしついでにほひは乃  
たけりしちかきあつとち  
まを序とあはれ何とあはれ  
へしとあはれまはれしとあはれ

江上隱の玄堂書

續虚栗集

春之部

改正

新卒を御慶よりあり八十年

任口揮

池やうが形もいりけとる春

芭蕉

ゆきほかに娘いも春を雑考下

自悦

来としてサカり畑や老乃出

杉風

卒の花富士いつ回をらすすがく

麩時

くくくくくくくくくくくくくく

文鱗

元日や家はゆるりのと刀帯  
 去來  
 古男 舉白  
 古男 沿邊  
 山店  
 魚兒  
 当白  
 千春  
 觀水  
 其角

草一うううう斎うう入時  
 山川  
 如泥  
 野馬

遊大音寺

梅う香やと食のあもろづのう  
 具角  
 文鱗  
 曲水

老慵

蛎うりのあま口をそと老の賣とそ  
 芭蕉

落乃とくほくもく人の縁ゆれ 嵐雪  
たふ半や新州さしと土筆 文鱗  
くみれく齊さくく 芭蕉  
春あさく川邊ふと根竹小 冬市  
路く東ツカもら家牧菜の 沾徳  
くはくく 全峯  
く地くく 由之

春行

昼乃病等よまきゆるまあか 佃化

とくくくくくくく 沿道  
白雲れ翅よまあむ片帆の 紋水  
村の鶴つくくくくく 巴風  
巻村く見まけくくく 野馬  
寒食乃烟まきれあさく 青亞

月游のくくくくく

乃らの波を離あつた武家

花の月とつて

ねはた、旭乃あり 不ト

海より家も遠く近き日外 峽水  
浦よりや舟のぬきもよき 扇雪

かざりし大

巢の多けん幣くく入り村雀 峽水

板久のこま

儂月つとも終ぬ情う那 同

中山の路をえりわく

廣く野に塔みよとや 不ト

春のふんこを食えたりす 琴風

旅行

水よ 舟より

ひげや鶴乃飛込 半残

巢より舟の舟のたゆむ 舟竹

すく子に肌かろく 三園

雀子やあり障子れ 其角

結廬在人境

夕の影所 全

くろくし 曾良

世つらきものあり  
閑やうらやうら

肩繪をやはらしたる蝶の秘つりたる 正風

青柳よらよらと 瞳をさすあふ 嵐蘭

ひすりの月をこぼれたる柳の 衛門

白をまはびく見立習ふ柳の 魚兒

曲らばをさびくまかぬ柳の 其角

柳の敷もさす歌をけし 同

おもしろきつらき  
つらきつらきつらき  
つらきつらきつらき

妻もわらば戀人へ 家野 猫の 魚兒

嘯を分隊 孤懸る 水 觀水

春晴

海つらき 虹をけし 戀る 其角

重三

不長女乃 離れ 風雷

離れぬ女も 女は 孤屋

小式部より 世を 離れ 紋水

所へ 顔をかき 枕を 舉白

とよふ 離れ 小壺 其角



~~~~~

世に酒を飲めば 醜く 雞 其角

草庵

花の香を待て上りては 葎草一花 芭蕉

鶴の巢もみくらふ 花のちや 誠小 同

もれぬわらわのものを くらふらん 外 風虎

~~~~~

獨りゆく ひとりもの 花の 文麟

~~~~~ 花の物の中 舉白

花折と 花の意あはれ 仙人

さうされ 基おけ 安重

何事にも 人走 由之

花をく 花の 巴風

魚見

~~~~~

花盛 古く 菘露

詠唯一心

~~~~~ 観水

妻ももて美人はもふるんか 破笠  
糸年乃る花よいころぬ小袖のし 蚊足  
むをゆえ人の懐く産子外 ト子  
御霊座いさう入あしの花巻 風笛  
あゝねえや尻あがりねる花の山 嵐雪  
つるよあつぬ憂世男乃情さか 去來妹 千子  
ふんはと母よつとつとつとつ 児 具角

日々醉如泥

花持く市乃礫よりあつとん 同

春興

露

川尻へ繡流るはくく川  
黄精あけ味の白の乾 千白  
もを同産衣冠を志し馬し 赤穂  
壁ぬき同知を踏る白雪 赤荷  
月夜へ流る榎のつるしや 嵐雪  
人をいひく移送あま 虚谷  
形城の淋る歌あまね也 角  
初秋もあまそくぬが流 泣

萬葉落く小舟あそくナ 荷  
 構のそとゆる 珠の雁 徳  
 報ふ田中しる月も悲しくて 谷  
 徳くをすすむ 僧の振袖 雪  
 思ひゆき揚弓くゆ 園深く 詠  
 三句の詠こて 夏を忘る 角  
 我鞆中 瞬めくゆき 乃 詠  
 吹上ふ垣の松丸 荷  
 燭くを花さく 乃 詠

ナ 小乃 詠生 乃 光 詠  
 濃墨又 燭コキ 乃 詠  
 氷を 浦次 乃 詠  
 東中 詠 乃 詠  
 常陸 乃 詠 乃 詠  
 炎中 懼オキ 乃 詠  
 松並み 石の 乃 詠  
 雨 夜 乃 詠

書りし月元の磯金蒸さるる  
 御廟の諸士の被あめ  
 角切つて御幣を放ち雲のそが  
 御幣を食く望みの陰  
 山ありし後を遺つてせきく  
 了々驚く舞のふり青  
 空貫くしき漆をへんす  
 雪のこゆ月を休せ塩焼  
 萬葉よりよめし御の名所と  
 谷

霞こりぬと又岩城山雪

日當午

川あそびかきうらひたつ橋  
 朝滴襟よつれさきさき  
 日さしぬれぬけりくたのら橋  
 雨とれく地息物むんそと橋  
 一すしにきふたかこりぬと  
 炭うりもひと橋のあし  
 坂足  
 湖風  
 文鱗  
 由之  
 全峯  
 野水

二世のいふ歌

あまのこゝろのいふものいふ山嶽  
 ちよつと酔のさめさる夕ささる  
 好まらしくしてさるる春を  
 公侯士乃のさるるさ嶽うな  
 栞のれりさるるさみさるる  
 石竈よさるるさみさるる  
 さるる人さるるさるる  
 さるるのいふさるる嶽うな

魚見  
 孤屋  
 野馬  
 且菴  
 自悦  
 嵐水  
 松江  
 松江

抱きく楯をのぶくあまの  
 魚見

剃髮

ゆめり乃水よ  
 荷子

勢田春望

やまのこゝろ身もはるるれ松子  
 其角

仁味太

電乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
 全

思ふはるるるるるるるるるる  
 ちよつと酔のさめさる夕ささる

誰平のいふ  
 和風

釣臺

舟乗ん洲濱乃最れ夕日小 沾蓬  
 山岨の籠よ餌エサまぐ端居ハ 冬市  
 らゆをさいさいさい鱧のうのぬい  
 名はくしいさいあでと舟早  
 やいらいにいかいねいまいはいしい 尚白  
 あいしいまいまいまいまいまい 沾荷  
 飛い山いをい敷い寸いのいまいういさいついしい 宇齊  
 吟いまいくいまいてい人いもいまいぬいついしい 破立

舟連華 始の終りや此のまい 文解  
 也いくいしいひいをい干いたいるい簪い丸い門い 三園  
 山いまいまいまいまいまい 山い 素堂

春朝

都あけくいらいんいらい買い銀いのいらい 嵐雪  
 山い置

午の時いはいほいついのい茶い摘い飲い 蚊足  
 春夜

ふいまいのい端い居いのい山い置い 其角

叶巻を詠じよ此

水と日と轉るゆゑの影とく山 芭蕉  
原中や物もつらひ心も憂 同

とてかきつる

晴くも月を流すひく山 孤屋

鳥宿をききし松一ひく 野馬

山々掃くゆ寒く御簾巻く 其角

光けくくく網子入魚 屋

氷多き礎のりけ乃雪く血 馬

稍<sup>イキ</sup>活るゆゆあけりちの松 角

禪<sup>ダ</sup>傍の赤裸なる涼くく 屋

李白ゆ象ゆ蓋乃致 角

俳諧の誠くくん草ゆく 角

雪入る力けり紗折る青 屋

裡原や猪<sup>イノシシ</sup>後るゆゆおけく 馬

男<sup>オトコ</sup>よりくくゆ女<sup>メ</sup>ゆゆあけ 角

ま<sup>マ</sup>を盗入とま<sup>マ</sup>のま<sup>マ</sup> 屋

くく<sup>クク</sup>のま<sup>マ</sup>のま<sup>マ</sup> 馬

血乃浹るの灯籠の朱ほほ  
 奥の指形は極る枝は  
 降くもむすあられの音ス  
 月丘の雜ふりわら、と  
 名  
 セい、い、鎌倉のくはら  
 昨と遠く、くはら  
 物くつぬ、くはら、くはら  
 子わら、くはら、くはら  
 親い思子、くはら、くはら

おしげ、くはら、くはら  
 書柜乃、くはら、くはら  
 四身、くはら、くはら  
 くはら、くはら、くはら  
 葉すく、くはら、くはら  
 珠散り、くはら、くはら  
 くはら、くはら、くはら  
 被、くはら、くはら  
 くはら、くはら、くはら



五月雨塗る人聲の響をきき  
海乃夕毛大津よりか  
思ふ所物笑ひまゝの隅  
此く揃ふ麦食の友

續西遊集

夏之部

尺錦集

六中尊しー油けくをわくお次 意朝

蜀魂 四より背をすくはる根を 暮角

郭公 なまき 飛う 雨小し 芭蕉

淡舟や 力をこかろく 月さす 其角

杜鵑 鳴を 移立 春や 和風

集あを侍  
諸よりあまの人

了此那妹よいへせほしき 其角

阿多一草うきしう霧の影 秋風

待乳山三句

舟揚とてうまめり あせくまは 如泥

あころまけ 穢まろた鼓子祀 其角

何とみ次麦搗印は掃く 蚊足

蚊足 ちくめり

部一と愛つく白みしうみせ

ふゆそくお度つ音響のそく 其角

川ゆや衣干<sup>キ</sup>搦<sup>カ</sup>なやうく 角

樽ぶつうく 角

物林の洞をり 角

扇<sup>ニ</sup>ゆ日記 角

萩の 角

僧と 角

瓦工 角

神一鳴つ 角

おろ 角

其角

吹原近き 吾輩の庵 角  
 思啼<sup>キ</sup>あつとゆらんゆ跡<sup>キ</sup> 足  
 お髪惜む月もさし 角  
 江を流るま亭の欄燭白くぬり 足  
 るゆ信<sup>ニカ</sup>はる湖田の秋風 角  
 都盛<sup>カケ</sup>鳥あつくふ首をんし 角  
 勇士の土産は梅を折 角  
 美女の影日長げりるも暮<sup>ナ</sup>安 角  
 梨<sup>リ</sup>ししとる奥の鈴を書 足

或はあつと住吉次なる遣<sup>ツカ</sup> 角  
 とし食を割て寄させを知 角  
 所々<sup>ト</sup>とる二条ううを茶先賣 角  
 夜を飛田の瓶こしり 角  
 高灯籠おの箱ぬりおけり 角  
 燈箱死さく湖乃腰<sup>クニ</sup> 角  
 精舎のうすまは流るゆり 角  
 隣あつて棧の糊ひく 足  
 通<sup>リ</sup>ぬく冬乃驛の夕あし 角

降りくつる雪の玉味香 足  
登りたる松の歌残もくおろく 角  
及敬う所ゆる同不偷う 角  
顔あまふ都の友のあつらん 月  
豆らふ教も入ら笑いと 角  
世中へおとれぬのうらあひて 日  
寺りりるにあそふ春の月 日

妾在閨

十八句

眉帯乃森くつ嬰子の白片 巴風  
螢消よと張の袢とく 山吹  
おとあふ二つお棊筭の樹 中庭  
袖口寒く袖は炭を次 風  
穢人の後よむ音え夕月長 化  
かちりと生んる餅のあ 角  
隠家之板垣もむ枯渾く 月  
傘一物あけおる君を同 化  
淺見にて乱る髪のあてやうふ 角

山鳥くつすあそびの 蓋 凡

死の秋獨にさすを以てあはれ 凡

野の身目上下ふ形しむら 角

殊更なる雪あたる明かきん 油

ゆきよ出口のせん茶の香 凡

道心中ゆく志は遠き 角

泪かきく小佛一乃等 凡

一鞭ぬぬの牛は有る氣 化

薄とりぬく遠山の曙 角

四月八日母乃の節りげら

刃もろく衣もぬか 凡 其角

初七ぬくひの節りげら

美もろく母をかくす 凡 同

五月七日追善會

卯あも母をかくす 凡 芭蕉

香清のこころ 凡 牛角

いさしのせきまをたたり月にて 凡 角

各尊

卯子よ目の脱馳の目敷りし 露沾  
 矢の音もささるる心もささるる 枳風  
 月影ささるる影にささるるささるる 沾徳  
 ああささるるもの然しささるるも立 舉白  
 啼入ささるる音もぬささるる時さ 嵐雪  
 夏草に活ささるるものささるるも亦 蚊足  
 蚊遣りささるるハサささるる香ささるる海 去来  
 ささるるやささるる音ささるる凡の音 野馬  
 笑子のささるるもささるるささるる 金峰

ささるるものささるるはささるるを彼水 魚兒  
 ささるるのささるるささるるのささるる  
 ささるるはささるるささるるのささるる  
 ささるるのささるるささるるのささるる  
 ささるるのささるるささるるのささるる  
 下部ささるる解ささるる日代佛 嵐雪  
 端午三七日よあささるる  
 ささるるささるるささるるささるる色さ 其角  
 何ささるるもささるるささるるささるる 紋水  
 ささるるささるるささるるささるる日向 魚兒

カニ  
其一也 葛さすり花の香 積風  
懽々姉よりききききわぬれ 歌棠  
るに乃々侍法し 高  
向あめん 川もきききききき 魚兒  
花あそぶ 棘さきこれ垣の中 結蓬

禾村

管よふ飛し ちり奥よふあめん 其角  
華やしつら霞の味い濃なり 嵐雪

自詠

髪くくく容顔蒼々し 五月 芭蕉  
五月月 去來  
さみさみい 禱し 水の徳 石徳  
石 巖翁  
然酒を 園のつ 白丁 巴風  
笑ひき 娘を 家 孔雲  
合和 友と 田植 其角  
母の 娘 女 野馬  
夕 務 甲 冬市

雨乃りの早苗に秋を疑うれ由之

田舎さしれやちを乞く

入あよ田舎乃ひくく里とらん 観水

きききききき男さうり代回松本 不

都カラン小桶も筋とれうばと 高政

あまのいらすね鶏を老を敵分り 濁子

續けもしりほくさり橋繩は 致也

月を入我もそ出も秋とあふ 風虎

甲斐山中

山嶺乃ねぞいの因るやちうた 道

吉寺や傍やまふさ寸後瀬のふ 三周

あうとみぎのむまにく

世をいへい安くあたる 復れ 自準

回京

ちんじしてあつあつ 夜の月 秋風

つゆききくうの致とるはしんか 魚兒

つやわ火よ煤ひくおしほふる外 溪石

つゆききくうのあうや 野馬







落得閑

廿二日... 文藝  
人の心を... 冬市

宿二尊院

涼山おや... 冬柏  
更におま... 去來  
涼... 冬柏  
晴... 由之

暮... 雲谷

奥羽里塚

は... 離舟

涼義經

上落... 輪栲

あ... 同

逐涼二句

涼... 其角  
園のお... 文鱗

雨後

つや光く水ものびる連る野馬  
 連るもく昨の國か包清水ト千  
 天々れ麻州美れくらもな全奉  
 直新くくくく様凡日陰外且只  
 山々やわ日陰よすく角豆垣  
 其角濁子

紅州よまわりて四郡

干帆をち力の流うして越へん自悦  
 つくくわ日陰よすく角豆垣 鉤雪  
 一つよろくくあつとけ外 虚谷

つよの流れとる

夕まよ流流しきる乞食外 巴風  
 夕まよ神巻したるけし 仙化  
 夕まよ鳥あつくつ音くれ 具角  
 夕まよ箕よ千の精のまろけに 宗源  
 夕まよ夜夜ぬんくく主式 古逢

午焚

有<sup>△</sup>人をもたしめしむる土用は 紋足

鎧<sup>△</sup>もくつ<sup>△</sup>のり<sup>△</sup>さん<sup>△</sup>土用<sup>△</sup> 去来

く<sup>△</sup>福<sup>△</sup>平<sup>△</sup>楊<sup>△</sup>魚<sup>△</sup>は<sup>△</sup>る<sup>△</sup>土<sup>△</sup>用<sup>△</sup> 具角

或人所持の<sup>△</sup>かん<sup>△</sup>さ<sup>△</sup>ん<sup>△</sup>

河もれ<sup>△</sup> 鐵<sup>△</sup>頭<sup>△</sup>池<sup>△</sup>袋<sup>△</sup>夏<sup>△</sup>後 澤庵



